

精神科閉鎖病棟に勤務する看護師の患者を知りたいと志向するknowingの能力に影響する要因

松本有希^{*,1)}、清水隆裕¹⁾、入江拓¹⁾

¹⁾ 聖隷クリストファー大学看護学部

【はじめに】

ケアリングのプロセスの第一段階であるknowingは、「他人の人生の中での出来事を、その人にとって意味を持つように理解しようと努力すること」と定義されている。特に精神看護においては、看護師-患者の人格的交流がケアの質に直結するため、knowingの能力が発動されることは重要であると考える。看護師が患者に対して関心を寄せ、knowingの能力を発動するには、看護師-患者関係だけではなく、看護師を取り巻く人間関係や環境の力学、そして看護師自身の特性や状態など、複雑な様相が幾重にも関連し、影響をもたらしていることが考えられる。

【目的】

本研究の目的は、閉鎖病棟で勤務している精神科看護師（以下看護師）が、入院している患者との関わりにおいて、ケアリングのknowingの能力を発動するための影響要因を明らかにする。

【方法】

- 1) **研究対象者**：研究協力に同意の得られた、精神科閉鎖病棟に5年以上勤務経験のある看護師9名
- 2) **データ収集期間**：2024年8月～2025年2月
- 3) **データ収集方法**：knowingの能力を発動するための影響要因を聞き取るインタビューガイドに沿って、1名につき約60分の半構造的インタビューを実施。インタビューは同意を得てI Cレコーダーに録音。
- 4) **データ分析方法**：質的記述的研究デザインによる分析
インタビューの逐語録を作成し、データとした。データは意味ある内容ごとに切片化し、コード化した後、内容の類似性に沿って、サブカテゴリー、カテゴリーへと抽象化した。

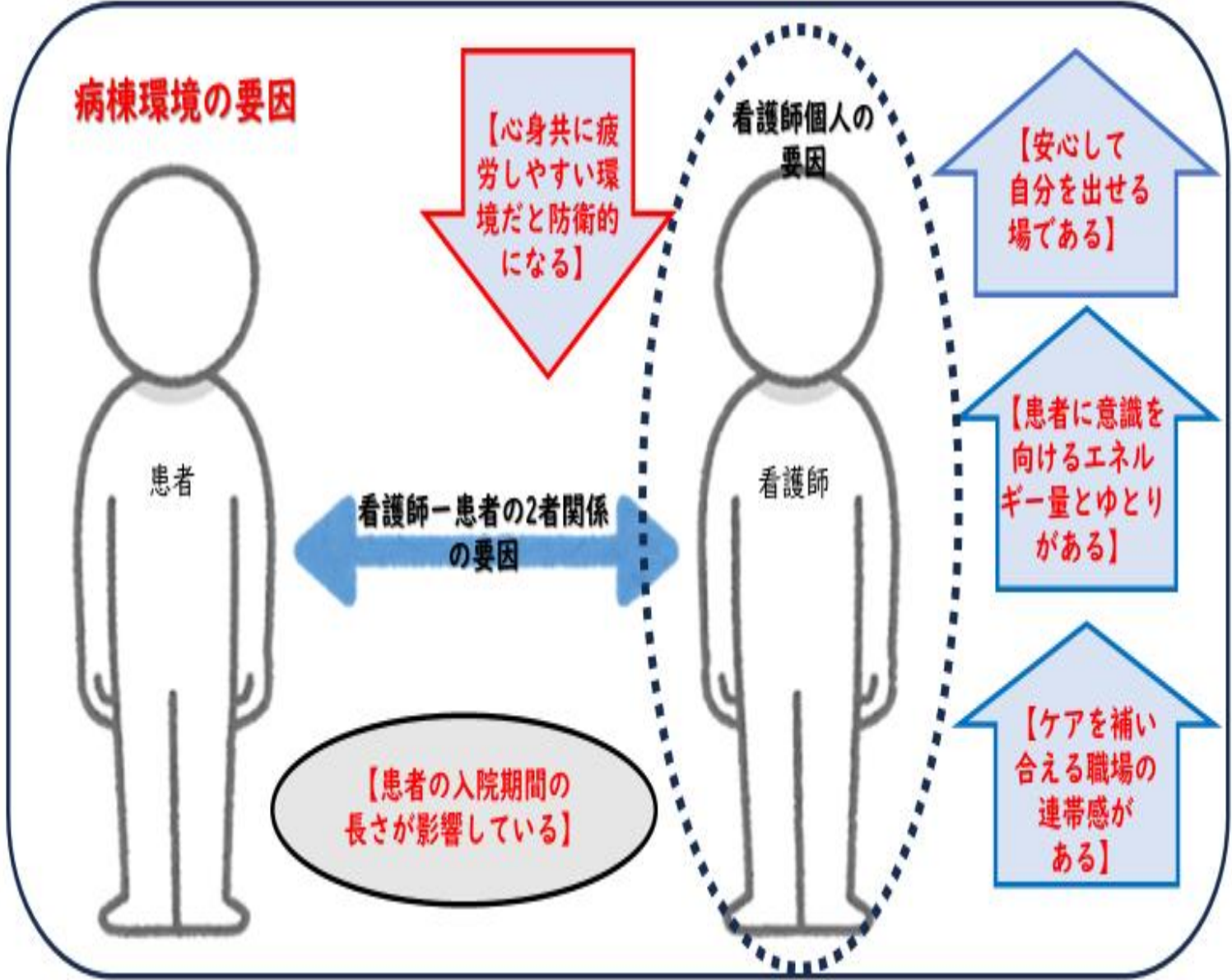
【倫理的配慮】

本学倫理審査委員会の承認（承認番号：24005）及び、研究協力施設の施設管理者または看護部倫理委員会より承諾を得た。

【結果】（研究対象者9名のうち5名分のデータ分析から）

（表1） knowingの能力を発動するための看護師を取り巻く環境要因

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
安心して自分を出せる場である	自分のありのままを受け入れてもらえる場である	・精神科に勤めて、「いいんだ自分」と感じられる ・「いいんだ自分」と思ったことで、肩の荷が降りた ・「とりあえずやってみな」と自分に挑戦を促してくれる ・自分の考えに「そうだよね」と賛同があり、認められていると感じられる ・自分で自分にプレッシャーをかける必要がない ・自分自身が無理に変わろうとしなくても、自然体で良いと思える ・周囲の人の顔をうかがわなくてもよい
		・客観的な正誤よりも、患者の主観を捉えようと模索できる職場に、自由さや面白さが感じられる
		・看護師間で、患者について「なぜだろう」と発信しあうことは、気力や体力を要する
患者に意識を向けるエネルギー量とゆとりがある	患者についてじっくり考えることが許される場である	・時間的な余裕がある ・人間的な余裕がある
	患者について「知ろう」と意識を向けようとする職場のエネルギー量がある	・自己自身の感情をコントロールできる余裕がある
	心理的なゆとりがある	・患者の言動の理由について他の看護師と一緒に考えることができる ・（患者の言動の理由を考えると）精神科での共通言語を使って話ができる ・（患者の言動を捉えようと）他の看護師と一緒に考えられる場では孤独になることはないと感じられる
ケアを補い合える職場の連帯感がある	他の看護師と自由に意見を交わすことができる	・ロールモデルとなる看護師がいる
	患者の人格を尊重した看護について、連帯感が感じられる	・職場の倫理観が守られている環境だと感じられる ・患者に直接ケアがしにくくても、受け持ち看護師であり続ける ・自分が対応しにくい患者は、他の人に関わりを代わってもらうことができる
	患者との関わりについて、職場スタッフで振り返りの機会が持てる	・うまく対応できた場面について振り返りの場がある ・上手く対応できなかった場面についても率直な振り返りができる
患者の入院期間の長さが影響している	患者の状態について、情報共有が常にされている	・患者の状態について、互いに語りやすく、聞きやすい掛け合いができる
	入院期間が短いと、カンファレンスが聞かれる機会がない	・入院日数が短いと決まっている ・カンファレンスが聞かれる間もなく、退院する
	入院期間が長期化すると、患者の現在から将来について考えることができるようになる	・長期入院の患者の将来を考え、退院を促したいと思う ・長期入院の患者の今現在の生活を思う
心身共に疲労しやすい環境だと防衛的になる	多様な役割と業務遂行に追われると、そつこなそうとする	・看護師は幅広い役割を求められる ・限られた時間の中で、正確な業務遂行が求められる
	患者の問題解決やコントロールの責任が強く課されると、弱みが見せられなくなる	・患者の言動を問題視し、問題を制御しようとする ・患者のためにあらゆる手を尽くす努力と挑戦の維持と不毛感が併存する
	プレッシャーを感じられると、自分だけで何とかしようとする	・周囲からのプレッシャーを感じる ・自らにプレッシャーをかける必要がある ・余裕がなく疲労感が蓄積する状況に耐えようとする ・無理をしても業務をこなすことが当たり前だと感じられる
病棟文化の中に、看護師の持つ常識を使って、自らの言動を正当化する雰囲気がある	病棟文化の中に、看護師の持つ常識を使って、自らの言動を正当化する雰囲気がある	・看護師が疲労しないよう、エネルギーを絞って、決められた業務の遂行に没頭する ・自分ではコントロールできない患者に対して感情的になる ・看護師の持つ常識から患者を見る



入院している患者との関わりにおいて、knowingの能力を発動するための影響要因（図1）

- 1) 入院している患者との関わりにおいて、knowingの能力を発動するための影響要因（図1）
看護師個別の要因・看護師－患者の二者関係の要因・看護師を取り巻く環境の要因の3要因に大別された。
- 2) 看護師を取り巻く環境に関する要因に焦点を当てて分析を行ったところ、**37コードから16サブカテゴリーを経て【安心して自分を出せる場である】【患者に意識を向けるエネルギー量とゆとりがある】【ケアを補い合える職場の連帯感がある】【患者の入院期間の長さが影響している】【心身共に疲労しやすい環境だと防衛的になる】の5カテゴリーが抽出された。**（表1）

【考察】

看護師を取り巻いている多様な環境、特に、病棟スタッフの織り成す空気感や病棟文化の中に、看護師自身が**ひとりの人間として、ゆとりや安心感を持って存在することができる環境**においては、**他者への好奇心や関心が高まりやすくなる**と考える。これは、他のスタッフとの連帯感に支えられながら、勇気を持ち、未知の存在である相手について、能動的に知ろうとすることに繋がっているものと考えられる。
すなわち、knowingの能力が発揮される前提として、看護師自身が安心できる場にいることが条件であると考えられた。

【結論】

看護師が患者のことを知ろうとするという、knowingの能力が最大限発揮されるためには、看護師個別の資質や対人関係の能力が問われることが多い。しかし、本研究により、より前提条件となりうる、**看護師を取り巻く多様な環境も、knowingの能力に影響を与えている可能性が示唆**された。